愛知労働問題研究所
月報
No. 10　1988年5月
名古屋市熱田区三本松8－2
電話〈052〉871－5603

研究者の再生産の問題

日本福祉大　長沢　孝司

１９６０年代の後半は、学生運動が大きく盛り上がった時期であった。この時期、私も学生自治会の運動に没頭していた。夜間部にいたのだが、この大学のズサンとしか言いようのないカリキュラムに心底から憤りを感じ、旧習墨守の教授会、保身ばかりを気にする教員を本気で「バカヤロー」と何度か罵倒した。講義などはほとんど出席したことはなかった。

思えば随分ならず者であったが、同時に自分でマルクスやレーニンの古典をむさぼり読んだ。そんな中でであった『河上肇自叙伝』はじつに新鮮であった。学問に打ち込む人間とは、こんなに美しいものかと思った。自分もこんな風に生きてみたいという思いが頭から離れなかった。

後に「学園紛争世代」とも呼ばれる私たちの世代には、私のケースのように、従来のアカデニズムの徒弟制のワクをバカにし、運動を学問の場にして育ってきた研究者が多い。そして、マルクス主義研究者の層も比較的厚い。

しかし、７０年代は学生運動が下火になり、シラケの世代となる。従って、私よりひとまわり下の世代はマルクス主義研究者の層が薄くなっている。「マルクスは旧い」という思想攻勢のまえで萎縮しているようにも見える。とくに残念なことは、労働問題の研究者の層が薄いことである。

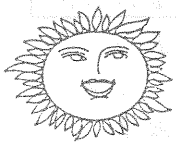
理論戦線の戦いという場合、いろんな戦いがあるが、そのなかに理論の担い手を育てることが含まれている。しかもこの戦いは、一朝一夕にはいかない。研究者として第一線に出てくるのは４０歳前後であるから、２０年後をみこんで青年を育てていかなければならない。

うれしいことに、近年ようやく若手の労働問題研究者がふえてきている。ＭＥ問題がその一つの契機になっている。進歩的な共同研究に参加する若手がそだってきているようだ。この動きをより意識的に育てることが大切だと思う。同時に、研究者は大学が育てるものという固定観念を打ち破る必要がある。民主的な運動のなかで民主的研究者を、２０年後を見越して育てていくという視野が必要になっているのではなかろうか。

（ながさわ　たかし、助教授、当研究所理事・所員）

「豊かさ」とは—

ユーゴ、イタリア1カ月の旅をふりかえって



中京大　猿田　正機

私は、この度たまたまユーゴとイタリアを旅行する機会に恵まれました。直接の目的はミラノ大学で行われる国際シンポジュウム（福祉大、ミラノ大共催、テーマ「脱工業化社会の労働組織と未来」）への参加ということであったが、私にとっては初めての海外旅行ということもあり「何でもみてやろう」という気持ちで日本を飛び立った。両国は1人当りGNPでも、賃金水準でもわが国よりはるかに劣悪とされている国である。わが国は今では異常円高にみられるごとく、国際収支の面でも、対外純資産の面でも世界一の「金持ち国」であり、ドル表示では一人当り年間国民所得がアメリカを追い抜いたといわれる状況にある。マスコミで流されるこれらの情報がいかに一面的なものでしかないかを私はこの旅行で痛いほど思い知らされることになった。

この1カ月間の旅は、私に「生活の豊かさとは何か？」ということをつくづくと考えさせられる絶好の機会となった。以下で、強く印象に残ったことを労働問題に絞って、思いつくままに書いてみたい。

ユーゴ、イタリアでは7つの工場を見学したが、まずショックをうけたのは労働者の働く姿であった。ユーゴのIMVでは、同じ自動車工場とはいえそのラインスピードはトヨタの3分の1以下ではないかとさえ思えたし、われわれが働く姿を見学するというよりは、われわれが見学されているような錯覚すら覚えたものである。こちらが挨拶をするとほとんど全員が挨拶をかえしてくれる楽しい工場見学であった。また、イタリアのフィアットでも労働者は仕事の合間に自由にタバコを吸ったり話合ったりする余裕をもちながら仕事を進めていた。また、オリベッティではイヤリングやネックレス、指輪、腕輪を身につけ、マニキュアをし、ハイヒールやブーツをはき、正装ではないかと思われる姿で働く女性作業員の姿には感動させられた。制服姿で脇目もふらずにピリピリして働く日本の労働者を見慣れている私にはやはり大変なショックであった。職場における「豊かさ」の一端を見せつけられた思いであった。

そのうえ、労働時間、拘束時間、通勤時間など労働に要する時間が日本よりはるかに短い。ユーゴ、イタリアでは拘束8時間、実働約7時間の週休2日制が一般的のようである。しかも、夏には、日本でもよく知られているように3－4週間のバカンス休暇がある。労働時間は午前6時－午後2時や午前

８時ー午後６時など会社やブルーカラー、ホワイトカラーで違いが見られたが、前者の場合には仕事が終わってからゆっくり食事をし生活を楽しむというパターンであり、後者の場合には昼休みに２時間をかけゆっくり食事をし休憩をとるというスタイルである。これも通勤時間が長くて３０分、せいぜい１０ー２０分という条件だからこそできることであろう。

また、オリベッテイでは工場見学の最後が工場の退社時間とたまたま重なったのであるが、終了時刻の１０ー１５分ほど前からタイム・レコーダーの前に労働者が列をつくっているのを見て驚かされた。拘束８時間労働というのはかなりキチンと守られている印象をうけた。日本一の企業といわれるトヨタでは定刻で退社できないことは言うまでもなく、残業に入ってからも決められた退社時刻以前に仕事を止めるだけの余裕は全くないといってよいだろう。同じ自動車産業でもＩＭＶやフィアットとトヨタの労働者の職場生活の質的違いを痛感させられた。この違いは当然、職場外の生活にも及んでいる。

例えば、残業なしの拘束８時間で午後２時には仕事を終えて家に帰って家族と生活をともにし、生活を楽しむＩＭＶ、フィアットの労働者とその２ー３倍の密度で労働し、残業を含め拘束１１時間、実働１０時間みっちり働かされ、そのうえサービス残業や休憩時間のＱＣサークル活動などを余儀なくされ、さらにはそれに通勤時間の長さが加わるトヨタの労働者の生活では生活面の量的違いというよりは質的違いを感じた。労働者、国民の時間的、身体的余裕が生活にも家庭の味、地域の味というものをつくり出すのではないかとすら私には思えた。それに反して時間的にも身体的にも余裕のないわが国の労働者、国民の場合には、全体的に食事や味を含めた生活の画一化が急速に進んでいる。ゆとりのない労働者の家庭に資本が提供するテレビ、自動車、インスタント食品、外食産業やサービスがはびこり家族関係のみならず家庭や地域の味が失われつつある。このようなわが国の実態を「豊か」と呼ぶことは私にはとてもできない。

もうひとつ、忘れられないのは、列車の窓からみたアドリア海沿岸の光景である。アンコーナ、ペーサロ、リミン辺りの美しい海岸線沿いに延々と続くキャンプ場やキャンピング・カーを目にして、イタリア労働者がバカンス休暇を過ごす姿が目に浮かぶようでこれにも感動させられた。有給休暇すら半分程度しか消化できないでいるわが国の労働者の実情を思うとき、日本を「豊かな国」と呼ぶにはあまりにも侘しい気がする。

さらに感心させられたのは、イタリアでは１５人以上の従業員を抱えている企業はどんなに経営不振でもめったなことで人員整理はできないことである。また、わが国のように転勤（単身赴任）や応援、出向などの強制もすることはできない。そのため安心して労

働者は地域に定住できる。しかも、職住近接で時間的余裕があり中北部では1週間に2度ほど親を呼んで一緒に食事をする習慣があるとも聞いた。家族で一緒に夕食をとることもできない多くのわが国の労働者を思うときあまりの違いに唖然とせざるをえない。イタリア労働運動の強さを改めて実感させられた思いである。

日本的経営のモデルとされているトヨタ式経営は一切の「ムダ」の排除を至上命令としているが、ユーゴ、イタリアの工場をみて痛感したことは、人間的労働というのは一見「ムダ」と思えるぐらいの余裕があって初めて成り立ちうるものではないのか、ということである。生活にしてもしかりである。トヨタのように一切の「ムダ」を排除し、労働者を精巧なロボットと同じように扱う職場では、「労働の豊かさ」「労働の人間化」などは望むべくもないのではなかろうか。

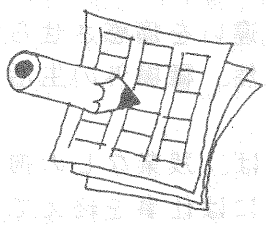
最後になったがユーゴとイタリアでは数人の仲間とわれわれの調査にもとづきトヨタの実態を報告した。「トヨタ生産方式」については大変立派なシステムとして宣伝されているだけに出席者には大変なショックを与えたようである。

今年の「トヨタ・シンポ」でトヨタの実態をイタリアで報告することを公言したが、幸いユーゴでも報告することができ、とにもかくにも責任が果たせてホットしている。トヨタの実態は外国ではほとんど知らされていない。その弊害をもっともっと知らせる必要があることを改めて痛感させられた。

全体としてユーゴ、イタリアを美化しすぎた感がないでもないが、ユーゴで最も豊かな地域といわれるスロベニア共和国、イタリアの中北部を中心に旅した私のこれが実感である。

（さるた　まさき、助教授、当研究所理事・所員）

『調査と政策』　創刊号



資料集：産業「空洞化」と大「合理化」

内容・・新日鉄「合理化」計画撤回を求める陳情書、新日鉄大「合理化」にたいする要求、大阪大運動実委・「市経済安定条例(案)」、同・円高「空洞化」調査、北九州の地位経済活性化についての提案など

頒価：６００円（会員、５００円）　申込は、愛知労働問題研究所

研・究・会・の・案・内

定例研究会

第４８回　６月１８日(土)午後１時
名古屋市婦人会館
テーマ　労働戦線をめぐる新たな情勢と階級的ナショナルセンター
報告者
①　労戦をめぐる情勢とナショナルセンターの確立
自治労県本部委員長
井上　利雄
②　ローカルセンターをめぐる若干の問題について
日本福祉大、当研究所所長
大木　一訓

第４９回　７月１６日(土)午後１時
名古屋市婦人会館
テーマ　輸入の自由化のもとでの愛知の農業・食糧はどうなるか

報告者　（交渉中）

・８月は、定例研究会は休み
・９月は　１７日(土)を予定しています（テーマ：新型間接税）

・婦人労働問題研究部会・
第５回研究会　６月１１日（土）
午後１時半から
名古屋市婦人会館
シンポ：民間大企業の婦人労働の実態とたたかい

・運動史研究部会・
第５回研究会　６月１４日（火）
午後６時半から
名古屋市婦人会館
報　告：運動史研究にあたって
斉藤　勇（愛知大教授）

・職場の健康問題研究会・
発足・第１回研究会
６月２５日（土）
午後１時半から
：発足の確認（運営要綱、役員など）
：第１回研究会
事例研究――「急性死問題」
こんごの研究計画について

第２０回

働く婦人の愛知県集会
愛知県勤労会館　小ホール
午前１０時から
全体会　記念講演
「人生８０年女の生き方」
櫛田　ふき
午後　分散会（９分散会）

第46回労働問題研究会の報告 (4月23日)

報告者は、中京大・猿田さん
自治労・岡田さん

最初に、本研究所所員でもある中京大学の猿田さんより「イタリア・ユーゴ1ケ月間の旅を振り返って―労働と生活の面からの感想―」と題する報告がなされた。

訪問された地域は、ユーゴではベオグラード、スロヴェニアのルブリアーナなど、イタリアではローマ、ナポリ、アドリア海沿岸のバリ、ペサロ、北部のトリノ、ミラノそしてフィレンツェである。また、訪問された企業は、ユーゴではＩＭＶ，イタリアではペサロ州副知事の紹介で家具製造企業2社、フィアト、オリベッティ、ＹＫＫ,ピレリである。

さて、猿田さんがユーゴ・イタリア訪問をとおして見聞してこられた多くの事柄のなかから、まず、労働について次の諸点について報告された。

一つは賃金についてであり、両国とも労働者間の賃金格差および男女間の賃金格差がほとんどない。例えば、ユーゴのＩＭＶでは普通の生産労働者が約3万5千円、ホワイトカラーで4万6千円～6万円だが、最高給でも約10万円である。また、大学に入るとそれだけ勤続年数が短くなり、その結果年金をもらう時期が遅くなるので経済的なメリットはないということである。なお、食料費が非常に安い。またほとんどが共稼ぎであり、同時に男女の賃金格差がないので、世帯収入は上で見た数値のほぼ2倍になる。

労働時間は、たとえばあさ6時から午後2時までの場合コーヒー・タイムが11時に入り、食事は帰ってからゆっくり食べる。また、オリベッティでタイムカードを押す場面に出あったが、終業時刻の4時30分前から20人くらいの人が並んでおり、4時30分になるとカードを押して帰ってゆく。

ラインのスピードは非常にゆっくりしており作業中でもコーヒーを飲んだりしている。女性は、イヤリングや腕輪をしてハイヒールを履き、そのままデートに出かけられるような姿で作業をしている。ラインのスピードはゆっくりしており計ろうとしても計れないほどである。フィアットのラインは自主コントロール・システムになっており、労働者が自分でラインのスピードをコントロールできる。例えば、しばらく休みたい時にラインを止めると、流れてきた部品は作業している労働者の方へ行くようになっている。もちろん多く労働すれば多くの報酬が出るよ

うになっているが、ラインのスピードが不揃いだという状態は日本では考えられない。

雇用面でいうと男女の差別はなく、職案に依頼すると男性が来るか女性が来るかわからない。失業率では、イタリアの場合休職票を出すと失業になり、例えば、大学在学中でも休職票を出すと失業者に換算される。従って、失業率が高くても失業者が町に溢れているという状態にはならない。「日本的経営」の導入状況については、ＱＣや提案制度が一部に採用されている。しかし、能力主義的管理と関連づけて行えないので実質的な効果は上がっていない。

生活についてみると、住宅は自分で煉瓦を組んで1-2年かけてたてる。親子関係は密接で、イタリヤで週に2・3回親を呼んで食事を共にするということを聞いた。テレビは少なく、あまり見ない。テレビ漫画は9割以上が日本製である。

その他、食事について、公園や街の様子、男女関係、原発問題、米作地帯見学など興味深い報告を聞くことができた。

つづいて自治労の岡田さんよりイタリアのトスカーナ州におけるイタリア労働総同盟（ＣＧＩＬ）について報告をいただいた。

ＣＧＩＬは470万人の組合員を有する労働者の全国組織である。その組織は、継続的、臨時的、フルタイム・パートタイムで雇用される官・民の労働者、共同組合、自主管理形態の会員労働者、仕事を探している未就業労働者、年金者にひらかれている。

協約交渉は、すべてのレベル（全国、地域、産業別又は企業別）で、労働組合が、それぞれの目標を主張するために採用した最も重要な手段である。

労働者の自由で自主的な組織のなかで労働組合の統一は、市民的意義以上にＣＧＩＬにとって放棄できない目標である。ＣＧＩＬの自主性は、全組織の財産である。官・民の企業化勢力、政府、政党から独立である。

ＣＧＩＬの目的は、

・すべての労働者、就業者、失業者、年金者の経済的・職業的・道徳的利益の擁護と生活・労働条件の改善、
・小数民族問題を配慮した労働者や団体組織の諸権利の尊重、
・疾病、障害、労災、一時的又は完全な失業、老齢の場合に家族をも含む労働者の健康保護、等々。

その他、岡田さんが見聞してこられたイタリアの労働運動、労働に対する考え方の地域による違い、生活の実態などの具体的で興味ある報告が討論のなかでおこなわれた。

愛知の労働運動・・1988年 4月

1日　国労県支部名古屋分会が1時間の時限スト　ｵﾚﾝｼﾞｶｰﾄやういろうを売らされている組合員30人が参加

3日　金属機械、一般中小、紙パの3連絡会が春闘決起集会

・県国民春闘共闘が「88国民春闘勝利4.3県民総決起集会」　1万人

5日　国民春闘勝利をめざす4.5港区総行動　「春闘勝利号」と名づけた船を先頭に1,600人参加

7日　統一労組懇第3次宣伝行動

9日　名鉄、スト中止（79年以降10年連続）

10日　地域労組”きずな”、名城公園で花見客に間接税反対の署名行動、あわせて支部対抗駅伝ﾏﾗｿﾝ

・愛知原水協が臨時総会

12日　88春闘勝利・争議解決で第29回栄総行動

・統一労組懇と3連絡会共同で「88春闘勝利4.12県総決起集会」どしゃぶりの雨のなか2,000人参加

13日　全港湾と検数労連の800人組合員が24時間スト

15日　統一労組懇全国統一行動日　愛知で医労連4単組・支部で1-2時間スト、17単組・支部で職場集会

17日　新型間接税粉砕4.17国民大集会　愛知から2,400人が上京

24日「農業・食糧・健康を考える」現地調査とシンポジウム

30日　臨教審関連6法案阻止緊急決起集会

愛知の政治経済・・1988年 4月

7日　トヨタの春闘賃上げ額回答、組合員平均1万6百円、アップ率4.43％。

8日　愛知県、第6次県地方計画（21世紀計画）の策定にむけた「あいち21世紀研究チーム」の検討結果まとまる、中部新国際空港を核に、名古屋から80－100ｷﾛ圏を「新伊勢湾都市圏」として総合的に整備すべきと提言。

11日　名古屋市、国土利用計画法に基づく「地価監視区域」を現行の5区から同市全域16区の市街化区域に拡大、愛知県も名古屋市周辺の市町の一部を新たに監視区域に指定。

18日　トヨタと日産、3月と62年度（62年4月－63年3月）の生産国内販売実績発表、3月の生産はトヨタが月間ベースで過去最高を記録日産は4ヶ月連続して前年同月実績を下回る、一方、62年度は国内市場の拡大により、両社とも国内販売は前年度実績を上回ったものの、除軽シェアではトヨタが前年度を0.1ポイント上回る43.2％となったが、日産は1.1ポイント減の23.3％へ低下し、格差一段と広がる。

22日　中日新聞社が中部地区の金融機関をのぞく上場企業92社の63年。3月期決算の見通しを集計、設備投資関連の製造業を中心に企業収益が急速に改善、増益の企業は昨年の「2社に1社」から「4社に3社」へ急増、2桁台の大幅増益企業も続々